

谷中菊まつり：歴史

日本の菊には長く特徴的な歴史があります。菊は、1000年以上前に中国から輸入された秋の花です。桜が春に対してそうなのと同様、季節の重要な象徴となっています。13世紀以来、皇族の紋章には菊が象られているほか、日本ではパスポートから50円硬貨まで、あらゆるものに菊が描かれており、国を象徴する花となっています。菊の栽培は趣味として人気を博しており、愛好家らは様々な種類の菊祭り、自分たちの花を展示しています。こうした祭りはたいてい10月に開催され、そのルーツは江戸時代（1603年～1868年）まで遡るものが多いです。

毎年恒例の谷中菊まつりも同様に、伝統行事「団子坂菊人形」を復活させるため、1984年に初開催された祭りです。菊の花びらで作られた「服」を着た人形が登場する祭りは、1910年に至るまで、谷中の秋恒例の人気行事でした。谷中にある大勢のプロの園芸家は、自分たちが栽培する花々を展示するに当たり、目を引く手段として、花の人形を用いていました。園芸家たちが営業する店は、地域に数多くある寺や、それらに隣接する墓地を訪れる人々のニーズに応じていました。菊人形の展示の他にも、谷中菊まつりのプログラムには、鉢植えの菊の販売や、飲食類の屋台、パレード、雅楽（伝統的な宮廷音楽）の夜間公演などが含まれていました。